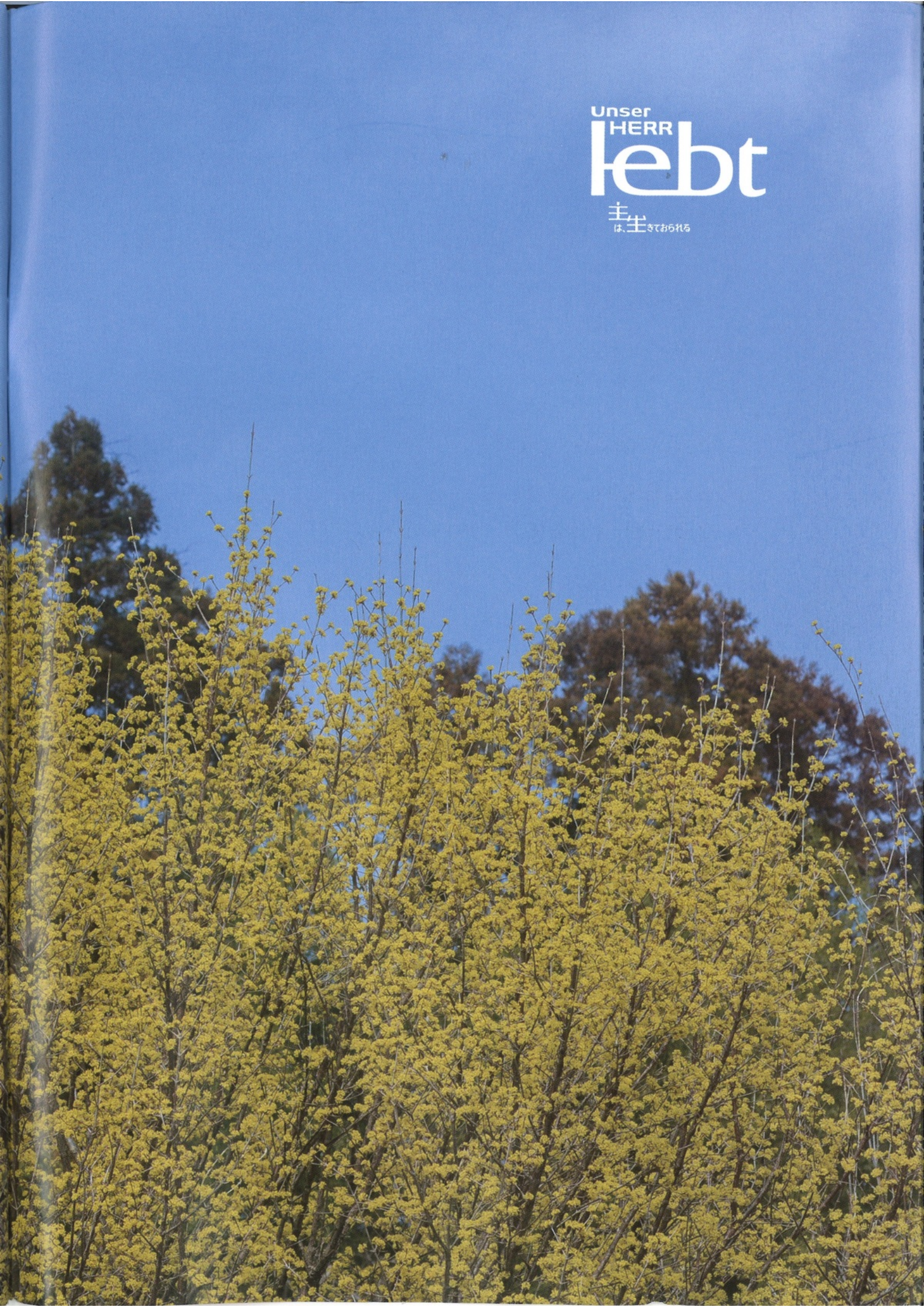
主は、生きておられる

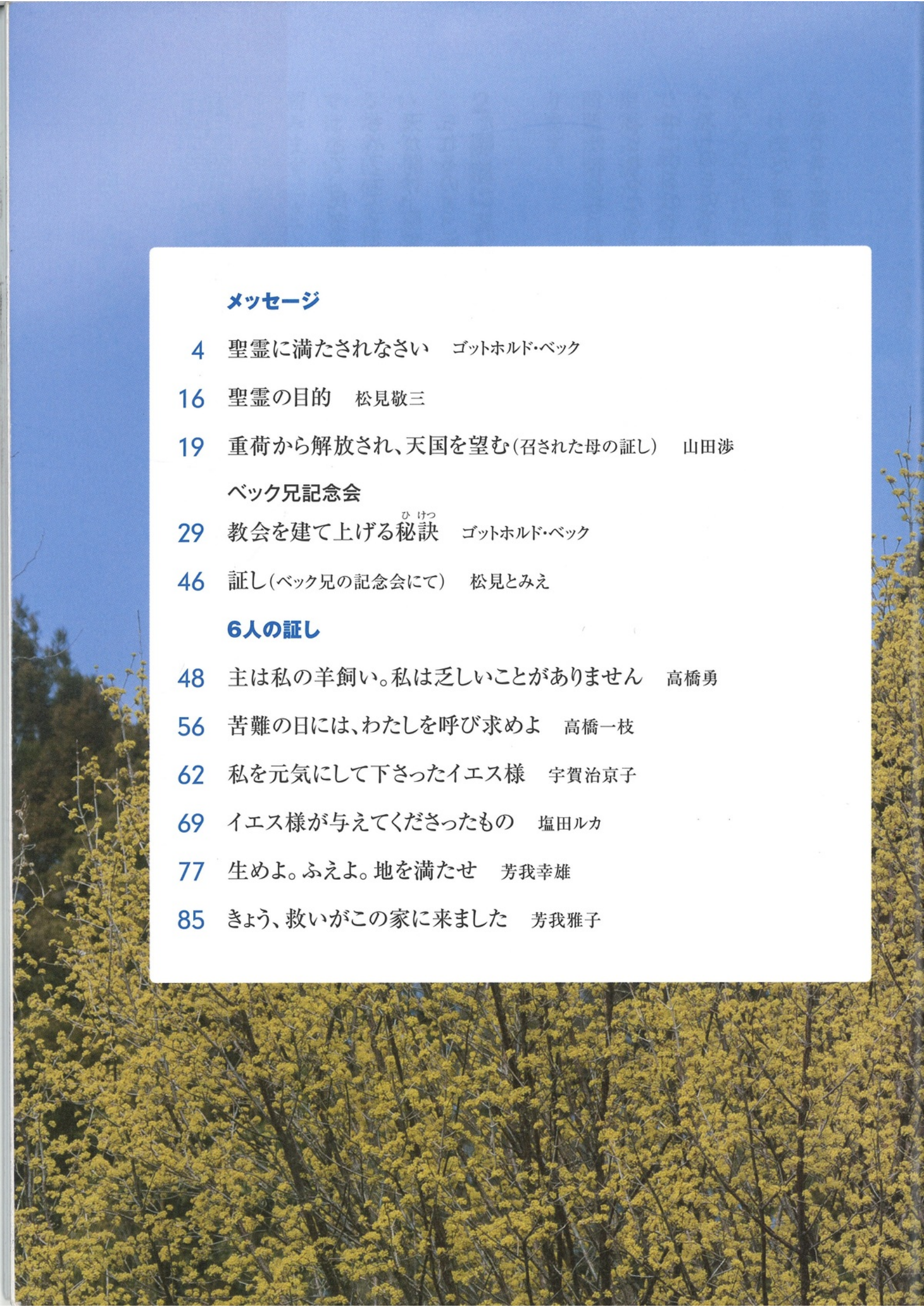
Unser HERR lebt



2019 graph magazine vol. 50

Unser HERR lebt


Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる



メッセージ

4 聖霊に満たされなさい　ゴットホルド・ベック

16 聖霊の目的　松見敬三

19 重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）　山田渉

ベック兄記念会

29 教会を建て上げる秘訣（ひけつ）　ゴットホルド・ベック

46 証し（ベック兄の記念会にて）　松見とみえ

6人の証し

48 主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません　高橋勇

56 苦難の日には、わたしを呼び求めよ　高橋一枝

62 私を元気にして下さったイエス様　宇賀治京子

69 イエス様が与えてくださったもの　塩田ルカ

77 生めよ。ふえよ。地を満たせ　芳我幸雄

85 きょう、救いがこの家に来ました　芳我雅子

聖霊に満たされなさい

ゴットホルド・ベック

さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

（ルカ　3・21～22）

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

（ローマ　8・9）

また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

（エペソ　5・18）

1. キリストの御霊を持たない人

きょうは、御霊に満たされることについてゆっくり考えたいと思います。

使徒パウロは「御霊に満たされなさい」とエペソにいる人々に書き送りました。また、ローマにいる人々に「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」と書いています。キリストの御霊を持っていなければ、キリストのものではない、つまり、救われていないということです。たとえ教会の牧師であろうと、ローマ法王であろうとも、もしキリストの御霊を持っていなければ、救われていないことになります。聖霊がその人の内に住まわれ聖霊の宮になることこそが、救われることです。聖霊の宮にされた人々だけが、本当の意味で人生において前向きに生活することができ

るのです。

けれども、キリストのものとされ聖霊の宮になっても、ただそれだけでは充分とは言えません。聖霊をいただいて、さらに聖霊に満たされなければならないのです。最も大切なことは、御霊に満たされることです。聖霊に満たされている人は、その苦しみが静められ、問題が問題でなくなり、欠乏は取り除かれるようになります。

2. 御霊に満たされること

ここで、主イエス様ご自身の場合を見てみたいと思います。それを通して私たちは、イエス様に用いられるために何を経験しなければならないかを考えるべきではないでしょうか。もう一度、ルカによる福音書を読みます。「さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。』」。イエス様の洗礼は、イエス様が公のご奉仕をされる出発点でした。この洗礼の時、聖霊は鳩のようにイエス様の上に下られたとあります。もちろんイエス様の洗礼は、私たちの洗礼とはまったく違うものでした。けれども、イエス様が経験なさったことは、私たちの経験でもなければなりません。つまり私たちは聖霊に満たされた者でなければならないということです。

また私たちはイエス様が聖霊によってマリヤの胎に宿られ、お生まれになられたということを知っています。聖書がこう証言しています。

彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。（マタイ　1・20）

もう一箇所、お読みします。

聖霊に満たされなさい

御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。

（ルカ　1・35）

イエス様が聖霊によってお生まれになった証拠として、聖書はイエス様が完全な、聖い、罪のない人生を送られたと言っています。

また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。

（ヘブル　7・26）

イエス様は神であられましたが、ご自分の意思で、この世に来てくださいました。罪と滅びに定められ、絶望し、悩み、孤独になった人間を救うという目標をもって、地上にお出でになられました。そしてイエス様がこの公のご奉仕を始める前に、聖霊が鳩のように主の上に下られたとあります。後になってイエス様は、このことについて次のように証しなさいました。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

（ルカ　4・18）

神の御子であるイエス様にとって、上からの力を着せられることは、ご自身の三年半におよぶご奉仕を特徴づける経験でした。聖霊はイエス様の上に留まり、イエス様は絶えず聖霊に満たされていました。

ペテロも聖霊に満たされた後、イエス様のことを「それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました」（使徒10・38）と伝えました。ペテロやイエス様の弟子たちが後に証言したことは、すでに

バプテスマのヨハネが言っていたことでした。

ヨハネはみなに答えて言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。

（ルカ　3・16）

そしてイエス様は、弟子たちがそのような経験をすることを約束なさいました。

「わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい」

（ルカ　24・49）

昇天なさる前には、弟子たちに次のように告げられました。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

（使徒　1・8）

バプテスマのヨハネが告げ、イエス様が約束なさったことがすぐに成就されたことは、使徒の働き二章に記されています。

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。…すると、みなが聖霊に満たされ、

（使徒　2・1、3）

聖霊に満たされなさい

主は、私たちをも同じ聖霊に満たしたいと願っておられるのではないでしょうか。私たち信じる者は、自分の人生が変えられ、そのことによってイエス様が栄光をお受けになり、多くの人が真理に至るようにと願

うべきです。聖霊に満たされることほど、信じる者にとって大切なことはありません。

イエス様は聖く、罪なく、罪人から離れていました。それにもかかわらず、なぜ、イエス様は聖霊に満たされることを必要とされたのでしょうか。私たちにはわかりません。それは奥義のようなものではないでしょうか。

一方、弟子たちの場合は違っていました。その点については、私たちも同じで疑問の余地はありません。聖霊に満たされることなしには、弟子たちにイエス様の福音は宣べ伝えられなかったに違いありません。けれども、彼らが聖霊に満たされた時、その人生はいっぺんに変えられました。私たちも主に喜ばれる人生を送りたいと思うなら、そしてまた、主が私たちを主のご奉仕にお用いになられるには、私たちもまた、聖霊に満たされなければなりません。

3. 鳩のような聖霊

そこで、まず一つの質問についてご一緒に考えてみましょう。

聖霊は、なぜ鳩のような形をして、イエス様の上に下られたのでしょうか。鳩について聖書はいろいろなことを告げていますが、おもに四つの特徴を挙(あ)げることができます。第一番目に純粋さ、第二番目に美しさ、第三番目は謙遜、そして第四番目は「喜んでする覚悟」です。

まず、鳩の純粋さについて簡単に見てみると、雅歌(がか)六章九節に次のようにあります。「汚れのないもの、私の鳩はただひとり」。これは、花嫁に対する花婿(はなむこ)の判断です。鳩は純粋なものであり、汚れのないものです。

次に鳩の美しさについては、詩篇六十八篇十三節に「銀でおおわれた、鳩の翼。その羽はきらめく黄金でおおわれている」とあります。このように、鳩は非常に美しいものであることを聖書は言っています。

それから鳩の謙虚さについては、マタイによる福音書十章十六節に「鳩のようにすなおでありなさい」とあり、

鳩の特性が素直であることを聖書は認めています。

鳩のもう一つの特徴は、喜んでする覚悟です。詩篇五十五篇六節に「ああ、私に鳩のように翼があったなら」とダビデが言ったことが記されています。鳩の特徴は、何かあればすぐにそこへ飛んで行くということです。

聖霊は、鳩のようにイエス様の上に下られました。なぜならば、イエス様はすでに鳩の特徴、すなわち完全な純粋さ、美しさ、謙虚さ、喜んでする覚悟を身につけておられたからです。父なる神様は、このことを次のようなことばで証明してくださいました。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」と。

ところで私たちの場合は事情が異なります。私たちの内には、純粋さというものを考えることが出来ません。私たちはみな汚れています。美しさというのも考えられません。イエス様の前に、私は忌むべき者です。謙虚さということも考えられません。私たちはみな、誇り高く、傲慢です。喜んでする覚悟ということも考えられません。私たちはみな自己追求的であり、自己中心そのものです。自分の意思を通そうとするのが私たちです。私たちはみな、生まれた時からそういう者であり、死ぬまでそういう者に留まるのではないでしょうか。もし私たちが聖霊に満たされなかったら、私たちの状態はこのままです。

聖霊は鳩のようにイエス様の上に下られました。なぜなら、イエス様こそ鳩の特徴、すなわち、完全な純粋さ、美しさ、謙虚さ、そして喜んでする覚悟をお持ちのただ一人のお方だからです。実際、聖霊に満たされた人の人生には、イエス様の純粋さ、美しさ、謙虚さ、喜んでする覚悟のうちの何かが明らかに現わされることでしょう。私たちのように蛇のような性格の持ち主は、聖霊に満たされることによって鳩のような性質を持つ者に変えられるべきではないでしょうか。

4. 聖霊に満たされている人

聖霊に満たされるとは、いったいどういうことを意味しているのでしょうか。いまみてきたように、イエ

聖霊に満たされなさい

ス様の純粋さを知ること、イエス様の美しさを反映すること、イエス様の謙虚さにあずかること、イエス様の喜んでする覚悟を経験することです。

第一に、聖霊に満たされている人は、イエス様の純粋さを知っています。イエス様が私たちの人生を聖めてくださるのです。聖霊に満たされる前、イエス様の弟子たちは、肉的であり、その人生は絶えず上がったり下がったりしていました。彼らは、誇りに満ち、妬み深く、党派心に満ち、復讐心に燃え、批判的な考えに満ちた者でした。けれども彼らが聖霊に満たされた時、もはや誇り、妬み、党派心、復讐心、批判的な思いなどの余地がまったく無くなるほどになっていました。彼らは、内面的に聖められ、純化されることを経験したのです。

そしてまさに、私たちもまたこのことを必要としているのではないでしょうか。つまり、あらゆる汚れからの聖めです。主なる神の霊が私たちを満たすことができるならば、私たちはイエス様の聖さを知ると同時に、自分自身の不純さ、汚さを知ります。私たちはそのありのままの状態で、つまり汚れたままで、主の御許に行くことが許されています。主の前で自分の過ち、わがままを告白することができます。そうするなら主は、新たに罪の汚れから聖めてくださいます。

力を持つために、聖霊に満たされたいと思っている人々もいますが、すべてのものに勝って私たちが必要としているものは、力ではありません。内面的に聖くされることです。その時はじめて主は、私たちを主の器として用いることがおできになります。

第二に、聖霊に満たされている人は、イエス様の美しさを反映するようになります。化粧をして美しくなるために、ある人はたくさんのお金を使ったりします。けれども本当の美しさは、聖霊が私たちを満たしてくださることによって現れます。聖霊によって満たされている人は、美しく魅力的ではないでしょうか。聖書にステパノという、初代教会の最初の殉教者のことが書かれています。彼は大胆にイエス様を紹介し、証し

しました。イエス様の御手の内にある器でした。そのために攻撃され、議会に引き渡されて、弁明せざるを得なくなりました。このときのステパノについて次のように記されています。

議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。
（使徒　6・15）

御使いの顔は、疑いもなく、きれいなものです。ステパノが美しかったのはどうしてでしょうか。それは、生まれつきの自然の美しさではありませんでした。ステパノは聖霊に満たされていたと書いてあります。

しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、
（使徒　7・55）

聖霊に満たされなさい

ステパノのように主を見上げる者は、主の栄光をも見るようになります。彼がイエス様を見たとき、イエス様の美しさが彼の顔に反映するようになったのでしょう。主を仰ぎ見ることこそが、考えられないほど大切なことです。

第三に、聖霊に満たされている人は、イエス様の謙虚さにあずかるようになります。別のことばで表現するならば、マタイによる福音書十一章二十九節にあるように、主は私たちを、心優しく、へりくだった人にしたいと願っておられるのです。

わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。（マタイ　11・29）

鳩の特徴は、胆嚢を持っていないことです。胆嚢から出る胆汁は苦いものです。苦さと争いと誇りとは、私たち人間の性格の特徴ではないでしょうか。鳩は、

柔和、謙虚さ、温和によって特徴づけられています。何と多くの人生が、誇りの胆汁のせいで破壊されていることでしょうか。

鳩の謙虚さは、どのようして現れるのでしょうか。あなたは、間違った事をしたと気がついたならば、その時、その事を正直に告白しなければなりません。「さっき言ったことを許してください。言うべきじゃありませんでした」と。また、「私はあなたに対して、批判的な態度を取ってしまいました。深く考えもせず、あなたのことについて話してしまいました。本当にごめんなさい」と。これこそが、主が求めておられる謙虚さです。

けれども、もしある人が他の誰かに「あなたから謝罪を要求します」と言うならば、それはその人の誇り、辛辣さ、喧嘩好きの印です。私たちの主イエス様は言っておられます。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば…」、そうしなければ、もちろん無理ですが「そうすれば、たましいに安らぎが来ます。」（マタイ11・29）

私たちの主イエス様は心の優しい方でしたが、決して弱い方ではありませんでした。それまで従ってきた弟子たちに、本当の意味で弟子になってほしいというのがイエス様の関心事でした。イエス様は、御足のあとに踏み従ってくる人々を、もちろん欲しておられます。どのようにすれば、イエス様のあとに従っていくことが可能なのでしょうか。弟子たちは聖霊に満たされたとき、自分の傲慢さや、自己追求、闘争心から完全に解放されました。聖霊に満たされたすべての人々と共に生活することは、本当に楽しみであり喜びです。人の心は、いかにして変えられるのでしょうか。聖霊に満たされることによってのみ変えられます。

第四に、聖霊に満たされている人は、イエス様の喜んでする覚悟を経験します。別の表現をすれば、聖霊によって満たされている人の特徴は、あらゆる主の願いを喜んで満たそうとすることです。主にだけ仕える

ことを喜んでする覚悟、イエス様の合図に応じて即座に行なう従順、主がなしたいと思っておられることを自分も行いたいという切なる願い、これが私たちの生活の特徴でなければなりません。次の詩篇は主の告白の預言ですが、私たちの願いを言い表すものともなっていれば幸いです。

そのとき私は申しました。「今、私はここに来ております。巻き物の書に私のことが書いてあります。わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」（詩篇　40・7）

私たちは、心から主の御心を行いたいと望んでいるでしょうか。このことは、一体、どうすれば可能になるのでしょうか。聖霊が私たちを満たす時、私たちは何があっても、御心だけが成されるようにという切なる願いによって満たされるようになります。聖霊に満たされるとき、私たちは主に次のように叫ぶようになります。「主よ。たとえどんな事があろうとも、御心が私の人生において成就されますように。」

5．聖霊に満たされるためには

終わりに、もう一つの問いについて考えましょう。私たちは、聖霊に満たされるために、何をしなければならないのでしょうか。パウロは、次のように証しする者でした。

私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。（1コリント　2・4）

御霊に満たされる生活の秘訣（ひけつ）とは何でしょうか。

一つは、主の御心への完全な明け渡しです。イエス様は父なる神様の御心に完全に従いました。「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」（ルカ22・42）。イエス様の変わらない祈りとは、こういう切なる

聖霊に満たされなさい

叫びでした。だからこそ、イエス様は父の御手にある従順な器であられました。その態度は、いつも「父よ。わたしはここにいます。どうかあなたのご自由になさってください」というものでした。「この地上でただあなたの御心だけが行なわれますように。わたしは何でもいたします」という祈りが、イエス様の変わらない願いの表れでした。イエス様がこの態度をお取りになられたので、聖霊は高い所からの力として、イエス様の内に宿られました。

二つ目は、祈ることです。はじめに読みましたルカの福音書三章二十一、二十二節に「(イエス様が)祈っておられると、…聖霊が…自分の上に下られるのをご覧になった」とあります。祈りこそ、聖霊に満たされるための前提なのです。

使徒の働き二章には、五旬節の日、兄弟姉妹が集まって祈っているときに、「みなが聖霊に満たされ」たと書いてあります。そしてその少しあとでも祈りの答えとして、弟子たち一同が聖霊に満たされたのです。

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

(使徒　4・31)

「使徒の働き」は、初代教会の歴史を語っているものです。教会の奥義を知らされ、選びの器とされたサウロのことがよく出てきますが、九章十一節に「そこで、彼は祈っています」と記されています。そしてすぐその後で、彼もまた聖霊に満たされました。「彼は祈っています」、祈りの答えとして考えられないことが起こったのです。

私たちが聖霊に満たされたいと願うなら、私たちの人生はすべて主に明け渡されなければなりません。主の御心だけを行なうということが、私たちの願いとならなければなりません。そしてまた、私たちの祈りは「主よ。私は、ただあなた様の命令だけを望みます」というものでなければなりません。

イエス様が、バプテスマを受けるためにヨルダン川

の中に立った時、主イエス様の切なる心からの願い、祈りは次のようなものでした。「父よ。わたしがここにおります。あなたの御心だけが、わたしを通して行なわれますように」と。聖霊は、主イエス様が与えられた使命を果たすために必要とした高い所からの力として、主の上にお下りになりました。

今日、イエス様は私たちに次のように言っておられます。「父がわたしを遣わされたように、わたしはあなたがたを世に遣わします」と。御子イエス様だけではなく、御父も私たちを遣わしたい、用いたいと望んでおられます。御父は、私たちを一人にさせないで、聖霊が私たちの上に下られ、私たちの中に留まるようにしてくださいました。

主イエス様の次の御声を聞く人は幸いです。「わたしを通して、父は聖霊の力によって、贖いのみわざを成就してくださいました。そして今、わたしたちは、あなたがたを遣わします。あなたがたを通して、誰でも罪の赦し、神との平和、永遠のいのちをいただくことができるのです。けれども、わたしはあなたがたを一人では行かせません。わたしに、あなたがたの人生の全支配権を与えなさい。そうすれば、わたしは、あなたがたを用いることができるようになります。主の霊があなたがたを満たし、あなたがたは器として用いられるようになります。」

聖霊に満たされるとはどういうことでしょうか。第一に、イエス様の純粋さを知ること。第二に、イエス様の美しさを反映すること。第三に、イエス様の謙虚さに与かること。そして第四に、イエス様の喜ぶ覚悟を経験することです。聖霊に満たされることほど大切で、そしてイエス様の御手にある器となること以上に大いなるものは何一つないでしょう。

聖霊に満たされなさい

聖霊の目的

松見 敬三
（吉祥寺キリスト集会）



わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。（詩篇　42・5）

この聖句とよく似ているのはローマ書7章24～25節です。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します」。これは内容として、より明確になっています。パウロにとっての「みじめ」の理由は同7章15～23節にあり、18節がその中心です。「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです」。ここで大切なことはこれが未信者の言葉ではなく、救われた人パウロの言葉であるということです。

しかし、救われたからこそパウロは悩むようになったのです。自分の絶望的な姿、みじめな姿に心の目が開かれること、これこそが聖霊によって救われた第一の結果です。そしてその悩みと同時に十字架による救いの確信と喜びが訪れるのも同様です。実に、信仰の喜び、救いの喜びの原点がここにあります。私たちはいつでもこの原点に立てば良いのです。原点、それは正（まさ）に「みじめと感謝のワンセット」と言えるのではないでしょうか。

私たちが救われたとき何が起こったというのでしょう。パウロはこう書いています。ローマ書8章1～2節「いのちの御霊の原理が、…あなたを解放した」。これはどういうことなのでしょうか。それは、自分自身は相変わらずみじめだが御霊に従う者となった（ローマ8・4）。つまり、かつては肉に従うしかない自分に、御霊に従うという選択肢が与えられたということです。そして、ダメな自分が「キリストの御霊を持つ人」となった（ローマ8・9）、自分は死んだも同然だが「霊が義のゆえに生きている」（ローマ8・10）。さらに、「御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださる」（ローマ8・11）。そして結論としてパウロは言います。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神のこどもです」（ローマ8・14）。結局、パウロが私はみじめだと言ったのはやはり聖霊の恵みと言うしかありません。確かにこの悩みは尋常でなかったに違いありませんが、それにもかかわらずパウロは「取るに足りない」（ローマ8・18）とさえ言っています。

聖霊の目的

こうして見てきた通り、聖霊の第一の働きは人に自分の罪を気づかせることであり同時に主の十字架を示すことです。そして何より大事なのは神に栄光を帰すことです。これこそが聖霊の目的であり、いつでもその通りです。自分は本当にみじめだという思いは主の十字架によって感謝に変わり、それによって主にご栄光が帰されます。「イエス・キリストのゆえにただ神に感謝します」というパウロのことばのとおりです。

聖霊はイエス様の死とよみがえりと昇天の証人ですから（使徒5・30～32）、その目的である私たちの悔い改めと罪の赦しを最も重視します。さらに大切なこととして、聖霊は私たちに罪の性質の理由を示す以上にその最終的な目的を示されるということです。つまり神のご栄光です。従って聖霊は私たちに意味なく悩みなどを経験させるのではなく、それらすべてが神のご栄光という明確な目的を持っています。だからこそ聖霊は、私たちの多くが自分の問題を早く解決して楽に

なることを望むときに、むしろ、悩みながら喜ぶこと、神の栄光のために主を待ち望むことを期待します。

詩篇42篇5節に戻りますが、この作者の抱える悩みがどういうものであるかは不明です。しかし自分自身に言っています、「神を待ち望め」と。そして詩篇43篇3～4節、特に4節は聖霊が与える悩みの目的を表しています。

こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。（詩篇　43・3～4）

このように聖霊は私たちに問題の原因や理由よりもその目的を示します。イエス様もご自分の十字架の苦しみの理由、すなわち人の罪という理由を求めず、むしろ罪の赦しという目的を示されました。主が復活されてペテロに会った時、何と言われたでしょうか。ペテロの失敗を問わずにただ「わたしを愛しますか」と前向きの質問をされたのです。私たちが自分の抱える事柄自体や事の理由に喜びを見いだせない時でも、それどころか、みじめにさえ思える時でも、主のご目的には大いに喜ぶことができるのです。

たしかにマタイの福音書26章28節「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです」の「罪を赦す」という言葉の背後には私たちの罪という真っ暗な闇が控えています。しかしイエス様には神のご栄光という目的だけがありました。ですから聖霊に従って私たちは、自分にあっても集会にあっても問題そのものよりも、聖霊の目的に目を注ぎたいものです。そして主のご栄光を忍耐強く待ち望みましょう。

重荷から解放され、天国を望む
（召された母の証し）

山田 渉（わたる）
（吉祥寺キリスト集会）



すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイ　11・28～30）

二〇一八年七月三十一日の未明、母が九十五歳で天に召されました。母は我が家で最初にイエス様に出会い、救われました。

母は大正十一年、佐賀県に五人姉弟の長女として生まれました。父親の勤務の関係で長崎県、福岡県、さらに一時期、中国の旧満州（現、中国東北地方）にも住んだことがあります。二十三歳で結婚。その馴れ初めについて母は何度か話していました。家に帰る電車の切符がタッチの差で売り切れ、やむなく次の電車までの時間を利用して女学校時代の友人の家を訪ねた時、その友人のご主人の弟を紹介されました。この弟が、後の私の父となります。母はこのわずかの時間の出来事をずっと悔やんでいました。

結婚して銀行員の夫と東京に住み、私の兄、私、妹の二男一女を授かりましたが、その結婚生活は夫の酒癖に苦しみ続ける数十年となりました。

少し父の話になります。父は八人兄弟の下から二番目。小学校低学年の時に両親を次々と病気で亡く

重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）

し、当時の習慣で寺に預けられました。寺ではひどい待遇を受け、食事も十分に与えられず、腐った飯を食べさせられたことは何度もあったそうです。病気をしてももちろん医者に連れて行ってもらえず、ただひたすら、うなされながら横になっていたと恨みがましく言っていました。何度も寺を逃げ出しましたが、その都度つれ戻されることの繰り返し。ついに寺を飛び出して農学校、東京の大学を苦学しながら卒業。戦争に徴用され、戦地ではまさに弾の下をくぐるような経験を何度も経て、やっと復員しました。そのような苦しい体験の中で、いつか酒の味を覚えます。ふだんは無口で生真面目ですが、一滴でもアルコールが入ると止まらず、人格が変わり、大声で暴れ、口汚く人をののしり、喧嘩をして回る。給料を一晩で飲んで使い果たすようなことは一度や二度ではありませんでした。

一方、母はと言うと、明るい大家族で育ち、気が強くて陽気で明るい性格でした。新婚当初のことを、母は「墓場と結婚したみたいだった」と言っていました。

父が深酒のために重要な金庫のカギを失くしてしまった時は、妹を背負い、両手に子供の手を引いて銀行の上司の家に謝りに行きました。また、完全に酩酊して警察の世話になっていた父を引き取りに行くと、警官から口汚く罵られたり、月給日には、退社時間に合わせて銀行の玄関で父を待って、給料袋を受け取りに行った（そうしないと一日で飲み代になってしまう）ことなど、あとで母から聞いた酒にまつわる話は、とても書き尽くせないほどたくさんあります。夫の帰り道にこっそり後をつけて殺すことを妄想したり、病弱で、性格も引っ込み思案で頼りない僕を道連れにして、心中しようかと考えたりもしたそうです。（兄と妹はしっかりしていたので、親戚にあずければ何とか育つだろうと思ったようです）母が妹を幼稚園に送り迎えする道の途中に教会があり、ある日、門の看板に聖書のみことばが掲げてあるのに気づきました。それが冒頭の聖書のみことばです。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあ

なたがたを休ませてあげます。」確かに、疲れて重荷を負っている人とは自分のことだと思い、わけがわからないけど、「来なさい」と言うなら行ってみようと母は思いました。

その数年前、母の弟が九州のミッション系の大学に行くようになり、大学の礼拝で聖書に触れてイエス様に出会いました。この弟が、苦しんでいる姉の様子を見て、何度もイエス様のことを伝えていました。でもその頃は、「なんで私が外国の宗教なんかに…」と全く聞く耳を持ちませんでした。けれども母が聖書のこのみことばに直接出会った時、「そうだ、行ってみよう」と思いました。宗教はみんないいこと言って、どんな問題もたちどころに解決すると言うけれど、この聖書のみことばは、イエス様のところに行けば、荷が軽くなるというところに、本当のものをなぜか感じたそうです。

自分が教会に行けば、夫の酒癖（さけぐせ）が治るのかと初めは期待したけれど、聖書はそう書いていません。イエス様のところで休息が与えられ、イエス様が一緒に重荷を負ってくれるので、荷が軽くなると言っているのです。それまで、夫さえいなくなってくれたら…、さもなければ自分が死のうかと思っていた思いが、フッと楽になり、肩の力が抜けました。それまで、「こんな夫と結婚したのは運が悪く、この夫さえいなければ、酒癖（さけぐせ）が治れば…」と思って夫を恨（うら）んで生活してきたけれど、実はそうではないということや、「自分は正しくて夫や周りの環境が悪い」と思っていたことこそ、聖書に書いてある自分勝手な思い、罪であると気づいたのです。自分のその罪のためにイエス様が十字架にかかられたと婦人伝道師に言われて、素直に受け入れました。それまでに数年を要しましたが、いつも自分のために祈ってくれていた弟たち（その頃は下の弟も主を信じる者に変えられていました）がいて、婦人伝道師の導きがあり、多くの信仰の友人たちの支えがあって、三十六歳の時にバプテスト教会で洗礼を受けました。

それから、兄、僕、妹とそれぞれイエス様を信じまし

重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）

た。父は一緒に教会に行きはするけれど、自分の酒に対する弱さがあり、なかなかイエス様を受け入れようとしませんでした。それでも「わし一人だけ天国に行けないのは困る」と、ついに受洗を決意しました。母の受洗から七年ほどかかったことになります。これでクリスチャンホームとなりました。

イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

このみことば通りのことが実現しました。しかし、それでも父の酒癖は簡単には治りませんでした。確かに飲酒の回数は減りました。「酒をやめる」とみんなの前で何度も誓い、誓約書もたくさん書きましたが、気がつくとフラフラと居酒屋に足を向け、泥酔するまで止まりません。母を含め、家族はさらに苦しみましたが、一番苦しんだのは父自身だったのではないかと今になって思います。教会ではクリスチャンホームとして一家揃って礼拝に出席します。教会でも様々な役割を担うようになりましたが、父自身、抜けたいと願っている飲酒の悪癖から逃れられないのです。それでも日曜日になると礼拝に出て讃美歌を歌い、牧師の説教を聞く。ますます自分を責める。そんな繰り返しだったと思います。使徒パウロの悲痛な叫びがあります。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。（ローマ　7・18〜20）

クリスチャンホームと言って表面を取り繕っていながら、実態は少しも良くなっていないことに母は苦し

みました。「イエス様は十字架にかかってまで私たちを愛していると言っていながら、何故夫の悪癖の一つさえ変えられないのですか」という叫びを上げました。一方でイエス様の十字架ってこの程度なのかというサタンの囁きに苛まれていました。母自身健康上の苦しみがあり、多くの病気を持っていました。腎臓結石、糖尿病、腎盂炎、脊椎管狭窄症、肺がん。大きな手術だけで十回は下りませんでした。自分のことを「病気の問屋」と言って笑っていました。

さらに大きな試練が来ました。私の兄が三十六歳で亡くなったのです。小さい時からしっかりしていて、学校の成績はいつもトップ。身体も大きく、いろいろな才能に恵まれていました。母にとって、父に関わる様々な劣等意識がすべてその兄の優秀さでカバーできていたといってもいいくらい頼りにしていました。まだ僕たちが幼い頃、父が酔っぱらって帰る途中、遠くから大声で歌い騒ぎながら帰って来る声が聞こえて、僕と妹がおびえていると、兄が二人を抱き寄せて、「心配するな、お兄ちゃんがついているからね」と言ってくれるような、頼もしい存在でした。長男を失った母の悲しさは想像を絶するようなものがあったと思いますが、意外に母はしっかりしていました。これはイエス様を信じる信仰が支えとなり、天国の希望を与えられていたからだと思います。母が年老いて天国の話をする時は、この兄との再会を楽しみにしていました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

もちろん父にとっても大きな試練で、その受けた衝撃は母以上だったかも知れません。でも、兄の死から数年後、あれだけ自分ではどうしようもなかった酒癖

重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）

から、父は全く解放されたのです。父はすでに七十歳近かった時で、それから亡くなるまでの約二十五年間、本当に一滴の酒も口にしませんでした。あれだけ自分ではどうにもできなかった自分自身の弱さから自由にされました。母が父に聞いたことがあるそうです。

「本当にもうお酒は飲みたくないの?」

「いつでも飲みたいよ、でもそうはいかんじゃろう」

「そんなふうにしてくださったのはイエス様ですねぇ」

「そういうことじゃねぇ」。

上手にイエス様の恵みを自分から話すほど器用ではない、父の信仰の表現だったと思います。父が酒癖から完全に解放されるには、兄の死という大きな代償が必要だったのでしょう。これ以降、母にとって父との生活は静かで平安な日々となりました。

父はほとんど病気したことは無く「わしはアルコールで体の中はいつも消毒されとったから」が口癖。十年くらい前から車椅子が中心となった母を、買い物、食事、洗濯等々、一日中黙々と世話していました。母は元気な父にあれこれと命じるばかりで、父が「今までの罪ほろぼしじゃ」と言えば、「何の、まだまだよ」と切り返していました。でも、陰では「人生いろいろあったけど、今が一番幸せ。お父さんのお酒は大変で長かったけど、お酒のおかげでイエス様を信じることができたのだから」とイエス様に感謝していました。

父は二〇一四年八月、九十六歳で召されました。「天国に先に行く。待っている」、「母さんが残ったら寂しがるだろうから、あとは頼んだよ」と言い残して逝きました。

それから四年間、母はヘルパーさんの在宅介護、そして隣に住む妹と近所に住む僕たち夫婦の交代の食事と就寝の世話を受けながら過ごしました。口癖のように「人生いろいろあったけど、今が一番平安で幸せねえ。感謝だわ」といつも言っていました。生前から葬儀の時に歌ってもらう聖歌は、母の愛唱歌である「人生の海の嵐に」と決めていました。

「人生の海の嵐に、もまれきしこの身も、不思議なる神の手により、命拾いしぬ。いと静けき港に着き、我は今、安ろう。救い主イエスの手にある身は、いとも安し」　（新聖歌第二四八番、歌詞の一部）

後で妹から聞いた話ですが、いつの頃からか「自分ばかりが苦労してきたように思っていたけど、みんな『人生の海の嵐』にあっているのよね。傲慢だったね。今は、『自分はちりに等しい者』（新聖歌四二九番）だけど、『主が私の手を取って下さる』（同四七四番）という聖歌の言葉通りだと思う」と言っていたそうです。あれだけ世話してもらっておきながら、お酒のことを思い出すと、父に対してはあまり優しい態度を示さなかった母でしたが、召される数週間前には家内に問われて、「（今一番会いたいのは）お父さんかしら」と答えたそうです。もうすぐ天国に行くと思ったのか、あれほど父に厳しく接した母のことばとしては意外であり、今になると大きな慰めです。

最後に母の葬儀を通して、思わされたことをお話しします。私たちは二〇一六年にベック兄を天に送りました。前後して母にイエス様を伝えた母の弟も天に召されました。幾つもの親しい人の葬儀に参列しましたが、イエス様を信じる兄弟姉妹の葬儀は希望にあふれています。母の訃報を親戚や友人たちに伝えると、全く違う二つのタイプの返事が返って来ました。一つは「ご愁傷さま、さぞやご落胆のことでしょう。早く立ち直ってください」。もう一つは「お母様が天に凱旋され、今は主のもとで喜びにあふれていると信じます」。最初の方の気遣いはありがたいものですが、実はあとの方がもっと嬉しいです。母とは地上ではもう会えないと言う寂しさはもちろんありますが、また天国で会えると言う希望のみことばを引用します。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）

（ヨハネ　11・25～26）

母にイエス様を伝えてくれた叔父も、がんで天に召されました。叔父は社会的地位もあり、各界の有名人との交流も多くあったのですが、召される前は面会の人を限定し、私たちが行くと「地上でどんなに有名な人を知っているといっても何の価値も無い。こうしてイエス様を受け入れてくれた人たちと交われることが、何よりもハッピーだ」と言っていました。そして最後の挨拶は「天国でまた会いましょう」。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

（ヨハネ　14・1～3）

これは、イエス様が十字架につけられる直前、弟子たちへの言葉です。イエス様を信じる者は、天国へ行けるという約束です。

イエス様が先に行って準備をしてくれている。条件はただ信じること。お金、修行、努力、勉強…何も要りません。目的地を知らされずに連れて行かれるとなると、誰でもとても不安になります。でも、子どもは親と一緒に出かける時、どこに行くのかを言われなくても、とても嬉しそうにします。親を信頼し、親と一緒ならきっと楽しいところに行けると信じているからです。ただ、素直にイエス様を信じれば、毎日喜びと平安が与えられ、不安と心配から解放され、希望を持って将来に備えることができます。イエス様が私たちの手を引いて、私たちの行く場所を示し、一緒に行ってくださる。イエス様を信じることは、イエス様につながり続け、信頼しておまかせし、ゆだねることであり、

ちょうど親の手をしっかり握ってついて行く子供と同じです。

死に対する人の態度には三つのパターンがあります。

一つは、死を直視しないこと。考えてもどうしようもないのだからと、死を考えないようにしてその話題を避け、縁起を担いで、死にまつわる事象に目をふさぎます。例えば「死」と言う音に近いからと、「四」という数字を嫌がるとか、方位除けなどの占いもそれに近いものがあります。数年前に日本でもベストセラーとなった本には、人生を楽に生きる方法の一つとして、「生まれた意義は問わない。死んだ先のことは考えるな！」と書いてありました。

二つ目は、人は死ねば無になると考えるパターンで、多くの日本人が抱く無常観です。そこから導かれる人生の目的は名誉、財産であり、人によっては快楽を求めて生きようとします。あるいは建設的に社会正義や道徳的なものを求めるかも知れません。約二十年前、伊藤榮樹という検事総長を務めた人が、盲腸ガンとの闘病をつづった「人は死ねばゴミになる」という本が評判となりました。特に高い教育を受け、能力のある人にとっては受け入れやすい内容です。伊藤氏が死に真摯に向き合う生活の記録をつづったものです。ただ私は、たとえその人がどんなに高潔な死に対する態度を貫こうとしても、天国に希望を持てない人に対しては、非常に重苦しい息の詰まるような悲しさを感じるばかりでした。

三つめは天国を目指す人々です。私が教会から十数年前に集会に導かれて驚いたことの一つは、天国をまるで子供が信じるように信じている人ばかりだったことで、ちょっと引いてしまいました。それでも集会の葬儀に何度か出席して、ベック兄のメッセージを聞いてからは、本当に天国が現実のものとして受け止められるようになりました。ベック兄が天国の話をする時、「天国はとても素晴らしいところで、行ったら二度と悩みと罪だらけのこの世に帰って来たいとは思わないよ」と嬉しそうに言っていました。今、ベック兄もこ

重荷から解放され、天国を望む（召された母の証し）

の素晴らしいところに行っています。母も、父も、兄も、叔父も今は皆天国にいて、やがて僕も行く。そう思うと嬉しくなります。聖書には天国の様子が次のように描写されています。

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。御使いはまた私に、「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです。」と言った。（黙示　22・1～6）

誰でも死の話題は避けようとしますが、聖書には真逆のみことばがあります。

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。（伝道者　7・2）

人には必ず死が訪れます。私たちは死んだ後どこに行くのか、先のことはわからないからと、目や耳をふさいだり、不安や苦悩の中に生きるのでしょうか。それとも天国を目指して、イエス様に手を引いてもらい、希望を持って生きるのでしょうか。子供のようになって、イエス様を受け入れていただきたいと思います。

ベック兄記念会メッセージ

2018年7月21日、西軽井沢国際福音センターにて、ベック兄の記念会が行なわれ、本メッセージの録音に一同で耳を傾けました。

教会を建て上げる秘訣

ゴットホルド・ベック

はじめにみことばをお読みいたします。マタイによる福音書十六章十三節から二十五節です。

さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」

彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。

このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天におい

教会を建て上げる秘訣

ても つながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。（マタイ　16・13〜25）

今、読んでくださったところは非常に大切な箇所です。イエス様の思っておられること、めざしておられる目的についてはっきり書かれています。すなわち「わたしは、わたしの教会を建てる」。

イエス様は目的を持たないお方ではありませんでした。いつもはっきりとした一つの目的をもっておられました。この時代にどのような目的をもっておられるか、イエス様は前からよくご存知でした。イエス様は目的をもち、目標をめざして死に向かって行かれたのです。そして、イエス様は死んだ後、三日目によみがえり、いまは天の御座に座しておられますが、イエス様はそこで休んでおられるわけではありません。イエス様はそこから御霊を送り、ご自分のご目的を完成しようとなさっておられます。

しかし、イエス様が望んでおられる目的とは何でしょうか。

今、話したように、イエス様ははっきり言われました。「わたしは、わたしの教会を建てよう」。イエス様のご目的はご自分の教会を打ち建てることです。イエス様がこの時代になそうとしておられるこのみわざを悪魔も知っています。もし知らなければ、これほどまでにこのみわざに反対し、逆らうはずがありません。けれどもイエス様は、かつて次のように言われました。「わたしは…わたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない」(マタイ16・18口語訳)と。

この教会を見せられた人々は、今日まで幾世紀もの間にわたって、驚くべき激しい教会に対する悪魔の働きを見て来ました。もし、イエス様が私たちの心の目を開き、ご自分の目的である教会を私たちに見せることができなかったら、主は決して私たちに「わたしの心にかなった者である」というみことばをかけることがおできにならないでしょう。

私たちの目的とは一体何なのでしょうか。悪魔がイエス様のご目的を絶えず心に留めているように、私たちも主のご目的を、いつも心に留め、考えているでしょうか。多くの人々は滅び行く魂を主の御許(みもと)に導き、それを一つの組織・団体に導き入れて、それで満足しています。しかし、イエス様はそれをもって満足されてはいません。何十年か前に、茨城県の那珂湊(なかみなと)の時代だったんですけれども、一人の姉妹が次のように言われたことは、きょうまで忘れられません。「私の一番好きなみことばはエペソ人への手紙一章二十三節です」。そこをお読みします。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ　1・23)

どうか、静かな所でエペソ人への手紙一章十五節から二十三節までを「主よ、どうか私の心の目を新たにお開きになってください」と祈りながらお読みになってください。

教会を建て上げる秘訣(ひけつ)

ここで、教会を建て上げる秘訣について、三つの事柄について一緒に考えてみたいと思います。第一に「三つの大切な点」、第二に「重要な質問」、第三に「必要な材料」です。

1. 三つの大切な点

まず、どうしてもはっきりとさせておかなければならない三つの大切な点があります。それは、新しい土台をもつこと、十字架が必要であること、そして、イエス様の絶対的なご支配です。

(1)新しい土台をもつこと

第一に、教会は新しい土台をもっているということです。イエス様は「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われましたが、それはどこでだったのでしょうか。マタイによる福音書十六章をみると、それは、ピリポ・カイザリヤの地だったことがわかります。(マタイ16・13)この地方は首都エルサレムから一番遠く離れた地方で、ガリラヤ湖の北端に位置しています。このピリポ・カイザリヤの地方で、イエス様はなぜ、ご自分の目的である「わたしは、わたしの教会を建てよう」というみことばを述べられたのでしょうか。

それは、ご自分のこのご目的は、今までの古い伝統とは何の関わりもない、新しいものであることを教えるために他なりませんでした。それまで、ユダヤには宗教組織があり、宮にまつわるいろいろな古い伝統がありました。しかし、イエス様はご自分の教会をこのような土台の上には建てないとおっしゃるのです。教会は、イエス様の教会でなければなりませんでした。ですから、イエス様は新しい土台をお建てになったのです。この土台は言うまでもなく、イエス様ご自身です。ペテロはイエス様にはっきりと「あなたこそ生ける神の子キリストです」(マタイ16・16口語訳)と申し上げました。

教会がイエス様の教会でなければならないのなら、その教会は肉の欲によらず、血筋によらず、人の欲にもよらず、ただイエス様によって生まれたものでなけ

ればならないはずです。ですから、教会は決して一つの組織のようであってはならないのです。人間は一つのクラブを作って、そこで聖書を学ぶことはできますが、それは決してイエス様のからだである教会とは言えません。教会は主である神によって生まれた一つの生きた有機体です。伝統や人の力によって生まれ、人の努力やこの世の力によって支えられていく教会は、ほんとうの教会とはいえないのです。

「あなたは生ける神の御子キリストです」というこのペテロの告白は、教会の秘密を解く「鍵」のようなものではないでしょうか。このことばは、教会の頭がイエス様であることを言い表しています。教会の頭であるイエス様は上から来られたお方ですから、イエス様のからだである教会も上から生まれたものでなければならないことは言うまでもありません。教会とは、この世から召し出された者を意味します。ですから、教会はこの世に関わりを持ち、興味をもってよいはずがありません。

次に、十字架がどうしても必要であることをちょっと考えてみたいと思います。

(2)十字架が必要であること

ピリポ・カイザリヤは地理的に首都エルサレムから離れた地方であるばかりでなく、霊的にも一つの意味があるのです。イエス様はこの地方で、初めてご自分が十字架におかかりになることを明らかにされました。二十一節にこう記されています。

> その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
>
> （マタイ　16・21）

どのようにして、イエス様はご自分の教会を建て上げていかなければならなかったのでしょうか。「多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならない」と主イエス様ご自身が言われました。イエス様とと

教会を建て上げる秘訣

もに教会を打ち建てるために働こうとする者は、そのためにイエス様が死に渡されなければならなかったということを知らなければなりません。イエス様はご自分のいのちを捨てて初めて、教会を打ち建てることがおできになりました。ですからイエス様と共に十字架につけられた者だけが、イエス様と共に働く者となることができると言えましょう。

人間の努力をもって新約聖書の教会について考え、構想を練ることが大切なことではありません。何にも勝って大切なことは、イエス様と共に十字架につけられて、この身が死に渡されるということです。私たちはパウロと等しく「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ2・20）と言えるようにならなければなりません。

イエス様の教会を建て上げるために必要なのは、いわゆるご奉仕ではなく、十字架を背負って、主に従うことです。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

（マタイ　16・24）

いつ教会は打ち建てられるのでしょうか。

私たちが主の御心は何であるかを知り、そのためにはどんなに悩んでも苦しんでも誤解されてもよいと覚悟を決めるときに主の教会が建て上げられていきます。多くの人々は熱心に主のために働き、仕えようとしますが「わたしは、わたしの教会を建てよう」と言われる主の御心を深く知りません。これは一つの悲劇と言えるのではないでしょうか。また、ある人々は喜んで真理を宣べ伝えますが、イエス様の十字架を担ってイエス様にどこまでも従おうとはいたしません。

「収穫は多いが働き人は少ない」というみことばがあります。けれども、今ある一番の悩みは、働き人の少ないことではありません。働き人の数より質が問題です。イエ

ス様はご自身の教会の土台を据えるために死に至りました。私たちも主と共に十字架につけられ、すべてを主に明け渡す時、初めて、主と共に主の教会を建てることができるようになります。

(3)イエス様の絶対的ご支配

イエス様は決して「わたしは一つの教会を建てよう」とは言われませんでした。「わたしは、わたしの教会を建てよう」と言われたのです。イエス様は私たちがイエス様と共に教会を打ち建てる仕事にあたることを許してくださいました。けれども、その教会をいかなる人間も自分のものとして、所有することは許されていません。イエス様の教会はあくまでイエス様の教会であり、所有権はイエス様にあります。

イエス様はご自身の教会をひとつのミッションや団体、組織、国民のために建てようとは言われませんでした。イエス様はご自身のために教会をお建てになります。

多くの人々は「私は主のために働いている。教会の責任をもっている」と言いますが、人間が教会を主に与えることはできません。イエス様はご自分の教会をご自分がご自分に迎えると言われました。エペソ書の五章二十七節、よく読まれる箇所です。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。（エペソ　5・27）

教会の所有権は一つの組織、一つの国民にはありません。教会はただイエス様のものです。教会はある宣教師、ある牧師のものでもない、すみからすみまで、主のものです。教会は聖霊の宮、主である神の住まい、御子イエス様の花嫁であるとあります。テモテ第一の手紙三章――これはパウロが愛弟子であるテモテに書いたのです――を読みます。

それは、たとい私がおそくなったばあいでも、神の家

教会を建て上げる秘訣

でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。（1テモテ 3・15）

このみことばを読むと、私たちにとって大切なのは、どのように教会を導くか、どのように教会を治めるか、どのように教会を助けるか、などということではなく、自分自身が神の家で、どんな生活を送るべきかが大切であるということがよくわかります。教会は神の家であり、主である神ご自身がそこに住んでおられます。教会はすみずみまで主のものです。ですから、教会を支配したもうお方は、イエス様だけであるべきです。イエス様は教会のお客様ではなく、教会の頭であり、支配者であり、したがって教会はイエス様の御心を行い、イエス様の願いを満たしていかなければならないはずのものです。

ここまで、どうしても知らなければならない三つのことを共に考えてきました。その一番目に、教会の土台は伝統や組織ではなく、新しい土台、イエス様ご自身であることを見てきました。教会の頭であるイエス様は、天から来られましたから、からだである教会も上から生まれたものでなければなりません。教会は、天的な有機体として、地のものとは何の関わりも持たないものです。二番目に教会は、キリストと共に死に、日々、イエス様の十字架を担ってイエス様に従って行く者だけが、その建設のみわざに参加することができるということを見てきました。三番目に教会の特徴は、イエス様だけがご支配なさるべきであることを見ました。私たちの場合も、ある人、ある組織団体、ある教派に属し所有されるものではなく、すみからすみまでイエス様のものであるはずです。

今まで私たちは、三つの大切な点について考えましたが、こんどは第二の事柄、「重要な質問」についてちょっと考えてみたいと思います。

2. 重要な質問

重要な質問は、私たちはイエス様と共に働く者でしょうか、それとも、イエス様の働きを妨げる者なのでしょうかという問いです。

「わたしは、わたしの教会を建てよう」と言われたイエス様だけが、この霊の宮を建てることがおできになるお方です。どんな人間もこれを建てることはできません。私たちは、主と共に働くことができます。しかし、優先権は常に主にあるべきです。人間は自分の思い通りにここ、あそこに教会を建てようと言うことはできません。

パウロでさえも自分で教会を作ることは出来なかったんです。パウロはタルソの町に生まれましたが、この町は大きな都市でした。パウロはこの町でも証しし、伝道したに違いありません。人間的な考えでは、この生まれ故郷に教会を打ち建てたかったに違いありません。パウロはやがてバルナバに導かれて、タルソからアンテオケに行き、そこで素晴らしい教会を打ち建てることができました。もちろん主がお働きになったのですが、これを見ましても、パウロは自分がどこで働くか、ということさえ主の導きによらなければならなかったのであり、自分では好きな所を選ぶことができませんでした。パウロは、主のご目的とご予定をよく知っていました。イエス様がご自分でご自分の教会をお建てになることを知っていました。だから、パウロはイエス様にその身を任せ、導いていただき「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」という態度を取り続けました。私たちもパウロと同じように主と共に働く者になりたいものです。もし、イエス様のみわざの邪魔をし、用いられない状態になったら、まことに悲しむべきこと、禍と言わなければなりません。

教会を建て上げる秘訣

主のみ手を縛り、主のわざを妨げる三つのことがあります。それは、一番目、自己中心の霊。二番目、二つに分けられた霊。三番目、狭い心、狭く他を受け容れない霊です。

(1)自己中心の霊

まず、自己中心の霊について考えてみましょう。イエス様は「あなたを建て上げる」とは言われませんでした。「わたしは、わたしの教会を建てよう」と言われたのです。もちろん、イエス様は私たちを祝福してくださいます。しかし、それは他の人々に私たちを通して恵みが及ぶための祝福です。

もし、私たちが自分たちだけの祝福を願い求めるならば、それは、イエス様の教会を打ち建てようとなさるその御手を縛り、主のみわざを妨げることになります。「わたしは、わたしの教会を建てよう」とイエス様が言われたその後、すでに、ペテロはイエス様のみわざを妨げようとしてしまいました。ペテロは自分のことばかりを考えていました。イエス様が十字架に行かなければならないと言われたとき、もし、イエス様が十字架で亡くなられたなら、自分も困ってしまう、そこでイエス様に十字架にはかからないでください、と頼みました。このようにペテロは自分のことを中心に考えることにより、イエス様のみわざを妨げてしまう結果になったのです。

(2)二つに分けられた霊

二つに分けられた霊も、主のみわざを妨げます。妥協することなく主に従わなければなりません。主の恵みによって導かれ、救われた人々は、互いに平和の絆を持って結ばれ、愛の交わりがなければ、教会は建っていきません。これは決してたやすいことではありません。まことの愛をもつことは難しいことです。しかし、私たちは自らの難しいことに目を留めず、主の恵みがそれをなしてくださることに目を留めていきたいものです。

いわゆる一致を図るために、真理を曲げることはできません。主の御心と反対の思いをもっている人々と妥協してまで交わっていくことはできません。けれども、どのように真理のためでも、兄弟姉妹に対して愛のない態度をとってはなりません。

たとえ他の兄弟姉妹が自分の考えと違う考えをもっ

ていても、その人の上に立ってその人を裁くようなことがあってはなりません。絶えず愛をもって、平和の絆をもって、一つの霊に結びついていかなければなりません。これがまことの愛であり、この愛なくしてイエス様のからだは建っていきません。教会を建て上げていくことは、決して簡単なことではありません。

主のみわざを妨げるものは、自己中心の霊であり、二つに分けられた霊であり、次に見る、狭い心、狭い他を受け容れない霊です。

(3)狭い心、狭い他を受け容れない霊

狭い霊は、イエス様の教会を建て上げる邪魔になります。

主の目は世界中のすみずみまで各教会を見渡し、ご自分の教会を建てようとなさっておられますが、イエス様は「わたしは、わたしの多くの教会を建てよう」とは言われませんでした。「わたしは、わたしの教会を建てよう」と一つの教会を建てることを願っておられます。このイエス様の、いわゆる「一つ」の教会は世界的なものです。

ある人々は日本の教会を建てようと考えています。そして日本人でない者は、外国人だからといって日本の教会から締め出そうとする人々がいます。これらの人々は、日本の教会は日本人が責任をとるべきだと考えますが、教会がある特定の国民、個人、団体のものではなく、ただイエス様のものであることを知らない人々です。もし、まことの教会が何であるかを心の目で見ることができなければ、主のまことの働き人となることはできないでしょう。狭い心の霊は、イエス様の御手を縛り、その働きを妨げます。

最後に「必要な材料」について考えたいと思います。

3. 必要な材料

教会を建て上げる秘訣

教会を建てるためには、どのような材料を使ったらよいのでしょうか。それにはペテロのような男を使う必要があります。イエス様はペテロに「あなたはペテロである」と言われ、すぐそのあとで「わたしは、わたし

の教会を建てよう」と言われました。ペテロは上からの啓示によって、イエス様がどのようなお方であるかを教えられ、人間が変えられていきました。ペテロのように上からの啓示によって主を知った人々を、主は教会を建てる材料としてお用いになることができるのです。

もう一度最初にお読みしたみことばを読みます。

するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」（マタイ　16・17）

イエス様はペテロをいつも「ヨナの子シモン」と呼んでおられました。シモンのお父さんヨナはどんな人だったでしょうか。聖書はペテロの父親について何も教えていません。それを知っている者は、誰もいません。シモンは誰も知らない、知られていない人の子でした。名もない人でした。主はこのように取り柄のない人を教会を建てるためにお用いになります。

イエス様はシモンが生まれつきの力をもって、主のみわざを助けるどころか、主のみわざの妨げになるので、彼を召し出すことができませんでした。けれども、イエス様はシモンの生まれながらの人を見ないで、このだめなシモンをご自分の恵みよって造り変えることができることをよく知っておられたのでした。シモンは、ヨナの子シモンのままではいませんでした。やがて彼は変えられ、主に「あなたはペテロである」と呼ばれるようになったのです。ペテロはキリストにある、新しい人間に生まれ変わりました。

ペテロはイエス様に「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白しました。イエス様も、彼に向かって「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです」と言われたのです。

人の心はイエス様を知ることによって変えられていきます。イエス様は私たちのためにどのようなことを

されたお方であるか、また、私たちのうちにどのようなみわざをなさるお方であるかを知り、それに基づいて生きるなら、そのような人をイエス様は教会を建てる材料としてお用いになることができます。

イエス様はペテロのような人を教会を建てるために用いられます。ペテロのような人とは、堅く立って動かされない人であり、強い人であり、そして霊的な人を言います。

(1)堅く立って動かされない人

シモンのような男が、主の恵みによってペテロと呼ばれる男に変えられました。ペテロという名前の意味は「岩」ですが、岩のように文字通り動くことのない者に彼は変えられました。教会を建てるためには、ペテロのようにはっきりとした立場をとる、動かされることのない性格の持ち主が必要です。

けれどもペテロはかつて、海の砂のように定まりのない、信頼のおけない人物でした。ある時には主を思い、その次の瞬間には主から目を離し人のことを思うといった人間でした。イエス様が彼に「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは血肉ではなく、天にいますわたしの父です。」と言われた直後に、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と言われなければならないような定まりのない男でした。天からの啓示によって、イエス様が神の御子であることを知らされた直後、もう、悪魔の手に用いられるといったありさまでした。これは、彼の性格が弱く、まことに信頼のおけない人物であったことを表わしています。このシモンが一体どうして、ペテロのような人に変えられたのでしょうか。

彼は十字架と五旬節の経験を通して変えられました。私たち人間は生まれながら、本質的に悪い性質を持っています。その人の持っている一番良い性質ですら、教会を建てあげるご奉仕には何の役にも立ちません。私たちはパウロのように「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」

教会を建て上げる秘訣

という経験を経て、全生涯を御霊のご支配のうちにゆだねるのでなければ、シモンのように揺れ動く、不安定な砂のような状態にとどまり、決して岩のように動かない、確かな歩みをなすことはできません。イエス様はまだ五旬節の経験をしてない弟子たちに、ご自分をすべてまかせることがお出来にならなかったのです。ですから、弟子たちに自分がキリストであることを誰にも言ってはいけないと戒められました。二十節に「そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた」とあります。弟子たちは信頼のおけない、自己中心的な人々ばかりでした。私たちは一体どのようにしたら、信頼のおける堅く立った者になることができるのでしょうか。二十四節を読みます。「それから、イエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』

ペテロは十字架と五旬節を通されてはじめて、岩のように動くことのない者になりました。ペテロは自分で自分をペテロ(岩)とは呼びませんでした。この名前は、主が、つけてくださった名前です。自分でどんなに努力しても自らを信頼のおける人間にすることはできません。マタイ二十六章からお読みします。

すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。 (マタイ 26・33～35)

しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる。」と言った。すると彼は、「そ

んな人は知らない。」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。（マタイ　26・73～75）

イエス様はご自身でシモンにペテロという名前をおつけになり、そうすることによって、ご自分が揺るぎやすいシモンを岩のように動かない者に造り変えることがおできになることをお教えになりました。ペテロは名前だけではなく、その性質が変えられました。これを経験した者を通して、主は教会をお建てになるのです。生まれながらの弱い性質をもったままでとどまっている人は、主のみわざを妨げ、主の御手を縛ってしまいます。十字架により、自己から解き放たれ、聖霊の支配に身を任せた人々だけを、主はご自分の教会を建てるためにお用いになります。もし、私たちがこのように造り変えられていかなければ、私たちの交わりは一つの仲良しクラブにとどまり、決して教会とはなっていかないでしょう。

(2)強い人

教会を建て上げる秘訣

ペテロのような人は、堅く立って動かされない人であり、そして強い人です。

「岩」のもう一つの特徴は強いことでしょう。

パウロはエペソ人への手紙の中で、「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。」（エペソ3・16）と祈っています。もし、私たちが主の御心にかなった教会でありたいと思うなら、私たちには主よりの強さが必要です。シモンはこの主である神の強さをもっていませんでした。ペテロという名前をつけられて主に完全に従おうと決心した、その時に反対のことをしてしまいました。イエス様を三度も否んでしまいました。ペテロ自体はそんなに弱い男ではありませんでしたけど、ペテロを引きとめ、落とそうとする、悪魔の力に抵抗するだけの、十分な強さをもっていなかったのです。

しかし、主の言われたとおり五旬節の日に聖霊が注がれ、聖霊に満たされました。五旬節のあとも、同じ

く悪魔の力は強く働きましたが、イエス様は約束どおり、黄泉に打ち勝つ教会を打ち建てられました。この闘いは、今日まで続いています。私たちは、共に一つになって、心を合わせて生活し、主にこれこそまことの教会であると認められるような教会に建て上げられていきたいものです。主が私たちを十字架と御霊により、強い人としてくださったら幸いです。

(3)霊的な人

ペテロは堅く立って動かされない人であり、強い人であり、それから霊的な人でした。第一コリント人への手紙十章をみますと、霊の岩について書かれています。

> みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。（1コリント　10・4）

岩は霊である（御霊の岩）、と書かれています。ペテロは肉につける信者から、霊的な信者に変えられるという段階を通らなければなりませんでした。ペテロは人間の思いでことをなそうとしたとき、イエス様に邪魔者と呼ばれました。

イエス様の教会は「霊の家」と呼ばれています。

> あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。（1ペテロ　2・5）

教会は「霊の家」である以上、それに連なる信者もみな、霊的であるべきはずです。多くの人々は霊的とはどういうことであるか、正しく理解していないようです。何か漠然としたものを考えているようです。これは誤りです。イエス様は霊的なお方でした。イエス様は心にあることをそのまま口に出し、説教されたことを身をもってなしていかれました。イエス様は、私たちが口先でなく身をもってみことばと御旨に従順に従

うことが、父なる神様の御心であることを自ら教えられたのです。

イエス様が建て上げようとなさっておられるまことの教会は、兄弟姉妹が心を一つにして共に礼拝し、祈る人々の共同体です。そのためには、それに連なる肢体である、兄弟姉妹ひとりびとりが霊的でなければなりません。同じ霊、同じいのち、同じ思いをもって、御栄えのために、心を用いていくものでなければなりません。ですから、イエス様の教会を建て上げていくことは、第一に、内面的な霊的な事柄であり、外面的な形は第二、第三の問題であるべきです。兄弟姉妹は御霊に満たされ、日々、時々刻々、主の御姿に似せられていくことが、まず大切です。このような者になりたいものではありませんか。主に満たしに満たされ、主の御姿に似せられた教会になりたいものです。そして、イエス様のからだの一部として、私たちひとりびとりがイエス様のからだの欠けたところのなくなるまでに、満たしていきたいものではないでしょうか。

教会を建て上げる秘訣



吉祥寺集会でメッセージされるベック兄（2014年12月23日撮影）

証し（ベック兄の記念会にて）

松見 とみえ

ベック兄の記念会の証しにふさわしくない者ですが、「古い」ということで証しさせていただきます。ベック兄とミンヘン姉の歩みについて、ほんの一部を短くお話しさせていただきます。

ベック兄とミンヘン姉に初めてお会いしたのは、お二人が三十六才になられて間もない時でした。ハイデが九才、ビッキーが三才、スーシーが一才で、五人の子育て真っ最中の時でした。厳しいドイツ式の躾（しつけ）に目を見張りました。私は独身でしたけれども興味深く見ていました。そして、このことが後になって自分の子どもの躾（しつけ）に大変役に立ちました。

日曜日はミンヘン姉の手作りのスープや、ブラーテンゾーゼやワイセゾーゼというソースでドイツ式のお昼をいただきました。集会後は、人数が少なかったので、一つの輪になって交わりができました。

こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣（けもの）に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

（創世記 2・20～23）

聖書は、女は男のふさわしい助け手として造られたと言っています。ベック兄とミンヘン姉はよく話し合いをされていました。ミンヘン姉は、ご自分の意見をはっきりおっしゃいます。ドイツ語になるとお話しの

内容は分からないのですが、雰囲気で何となく様子が分かります。

どのような状況でも話し合いの最後には、ベック兄が決められた決定にミンヘン 姉は、日本語で「はい！」と従われるのです。たとい、ご自分の意見ではなくベック兄の意見のように決定されてもです。ご自分の意見を押し通そうとなさいませんし、気持ちを引きずりません。

「あぁ、これが主にあるご夫婦なのだ！」と思いました。そして、主にあって夫に従うとは、こういうことなのだ、と見せていただきました。

「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」（エペソ　5・22）

ミンヘン姉は、本当に、ベック兄のふさわしい助け手でした。私も、そうありたいと心から願いました。今も、そうありたいと願っています。

証し（ベック兄の記念会にて）

ベック兄とお会いして主イエス様と出会うことができました。主イエス様からたくさんの恵みと喜びをいただいて心から感謝しています。吉祥寺集会は、家庭礼拝のような小さな集会から始まりましたが、主はこのように祝福してくださり、主のなさった御業（みわざ）と主の素晴らしさをたくさん見せていただき感謝しています。

これからも、主イエス様の御栄光が現わされ、主イエス様だけが賛美されますようにお祈りいたします。



ミンヘン姉（右）、長女ハイデ姉（左）、記念会にて
（2018年7月21日撮影）